

# 新王国時代のメンフィスとその墓地

## Memphis and its Necropolis during the New Kingdom

河合 望\*

Nozomu KAWAI\*

### 1 はじめに

古代エジプト新王国時代（前 1550 年～前 1069 年頃）は、テーベ（ルクソール）を根拠地とする第 17 王朝の末裔であるイアフメス王によって第 18 王朝が樹立したことで開始される。テーベは、第 11 王朝時代以来上エジプトの中心地として、ここを根拠地とする王朝によって繁栄した。イアフメス王は、西アジア系のヒクソス（「異国の支配者」の意）の放逐に成功したものの、西アジアに接する地域の防御と支配の安定、拡大のために北部に拠点を置く必要があった。そこで、第 18 王朝の初期に初期王朝時代から古王国時代までの首都であったメンフィスが再び国家の行政と経済の中心となり、トトメス 3 世の治世にはメンフィスを拠点とする「北の宰相」が任命された (Bryan 2005: 77)。しかし、これまで新王国時代の歴史は、比較的保存状態がよく考古学的発掘調査の進展しているテーベ出土の資料を中心に構築されてきた。テーベは、東岸に当時の国家神であったアメン神の総本山であるカルナク神殿とルクソール神殿などの関連する神殿群があり当時の宗教の中心であった。西岸にはディール・アル＝バフリーのハトシェプスト女王葬祭殿（記念神殿）などの歴代の王の葬祭殿が造営され、その背後のピラミッド状をしたアル＝クルンの岩山の麓に新王国時代の歴代の王が埋葬された「王家の谷」を始めとする広大な墓域が形成された。一方、新王国時代の行政の中心であった北部のメンフィスについては、現代のミートラヒーナ村の中に位置し、神殿や集落の発掘調査も部分的にしか進んでいない。また、メンフィスのネクロポリスの中心的な墓地であるサッカラでは、1970 年以降に本格的に新王国時代の墓地の発掘調査が開始された。これまで、サッカラ遺跡では、ウナス王のピラミッド参道の南側、サッカラ台地の東側に位置する猫の墓地ブバステオン、ティエ王のピラミッドの周辺、現在のアブ・シール村に隣接する北サッカラの台地の東側の崖下、アブ・シール南丘陵遺跡頂部などで新王国時代の墓が確認されているが、サッカラの新王

---

\* 金沢大学新学術創成研究機構 (Institute for Frontire Science Initiative, Kanazawa University, Japan)

国時代の墓地については、欧米の博物館、美術館に収蔵されている膨大な記念物、副葬品などの遺物が由来する墓の所在が不明のままである。また、マーティンは、サッカラにおける特に第18王朝前期から中期にかけての墓地の位置は、依然として不明であり、北サッカラの台地の東側の崖に岩窟墓の形態の墓の墓地が存在すると推測している (Martin 1991: 26-27)。これらの未発見の新王国時代の墓地が明らかになれば、遺物、壁画、碑文などから当時のメンフィスの人々の葬墓制のみならず、技術、社会、あるいは高官の役割、業績等も明らかになり、これまでテーベの資料に偏重だった新王国時代史をよりバランスのとれた歴史に再構築できることが期待される。

このような問題意識のもとに、筆者は、2015年より科学研究費補助金基盤研究(B) (海外学術調査) (研究代表者: 河合望) を賜り、未発見の新王国時代の墓地が埋蔵されていると想定される北サッカラ地域での調査研究を開始した。本稿では、新王国時代のメンフィスの墓地の中でも筆者が調査を進めているサッカラ遺跡の墓地と調査の成果の概要について解説する。

## 2 サッカラにおける新王国時代の墓地について

サッカラは、メンフィスの西側の砂漠に位置する広大なメンフィス・ネクロポリスの中心的な墓地として、初期王朝時代からグレコ・ローマン時代までの約3000年間にわたって発展した (図1、図2)。特に最古のピラミッドである階段ピラミッドの造営に始まり、古王国時代には南北に王のピラミッドが建設され、その周囲を囲むように高官のマスタバ墓が数多く造営された。古王国時代の終焉とともに造墓活動は減少するが、新王国時代に再び王都となったメンフィスの主要墓地として発展したとみられる (河合 2017)。

サッカラ遺跡における新王国時代の墓地は、前述のように、これまでに①ウナス王のピラミッドの参道の南に位置する第18王朝から第3中間期に年代づけられる墓地、②サッカラ台地の東側に位置する猫の集団墓地、ブバステオンに位置する第18王朝中期から第19王朝に年代づけられる墓地、そして、③テティ王のピラミッドの北側に位置する墓地の主に3カ所が知られている。以下、それぞれの主要な墓地の概要について記す。

### ① ウナス王のピラミッド参道の南の墓地

1843年にK.R. レプシウスの調査隊がウナス王のピラミッドの参道の南で新王国時代の墓地を確認していたが (Lepsius 1849-1859: I. 182-185)、その後100年以上にわたり考古学的発掘調査は実施されなかった。この場所には、テーベのネクロポリスの新王国時代の典型的な墓の形態として知られる岩窟墓ではなく、地上に小型の神殿形の上部構造を持ち、岩盤にシャフトを穿って埋葬室をしつらえた所謂「トゥーム・チャペル」の墓形態を持つ墓が造営された。

オランダのライデン古代博物館には、この墓地に墓が存在するとみられた第18王朝のトゥトアメン (ツタンカーメン) 王の将軍ホルエムヘブや財務長官マヤといった高官の墓

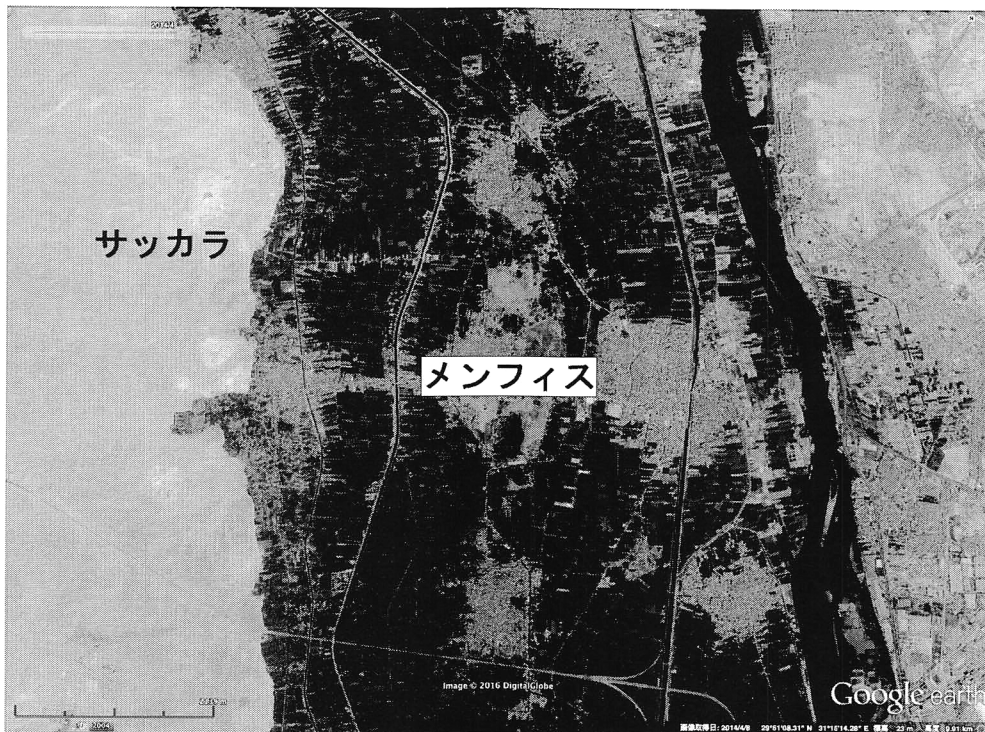


図1 メンフィスとサッカラの衛星画像 (©Google Earth)

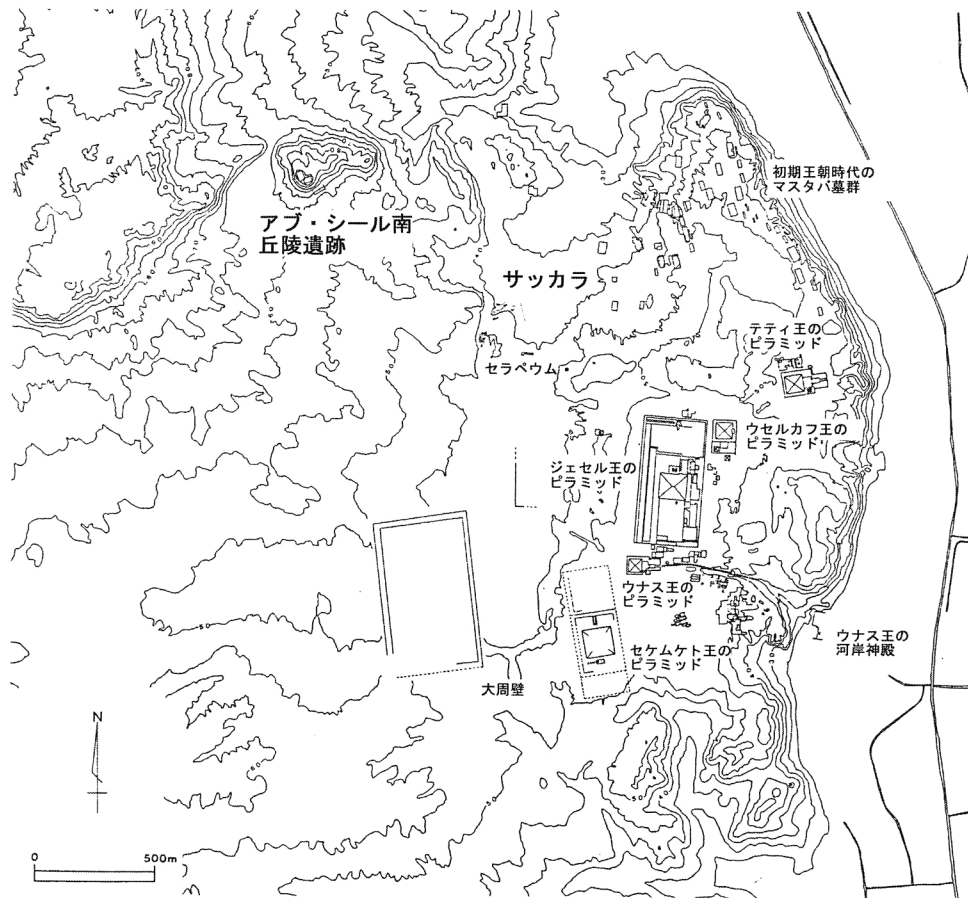


図2 サッカラ遺跡地図

由来の遺物を収蔵しており、1975年にそれらの墓の再発見を目的として英国エジプト調査協会と合同で発掘調査を開始した。調査隊は、ホルエムヘブ、マヤのみならず、同時代の後宮の監督官パイ、アメン神の牧牛長イニウイア、ラメセス2世治世下の王女ティアと夫のティア、アクエンアテン王からトウトアंकアメンの治世のメンフィスのアテン大司祭メリネイト（メリラー）らの墓を発見している (Martin 1991; Raven 2005; Raven and van Walsem 2014)。その北東部ではカイロ大学の調査隊によってラメセス2世の宰相ネフェルレンペト、財務長官アメンエムオペトの墓を始めとするラメセス2世の治世の高官墓が数多く発見されている (Tawfik 1990)。さらにカイロ大学の調査隊の調査地区の東側に位置するジェレミア修道院址付近からは、アメンヘテプ3世治世のメンフィスの大家令、アメンヘテプ・フィの墓が位置したと考えられている (Hayes 1938:18)。これまで調査された当該地区の新王国時代の墓は、ごく一部にすぎず、現在も発掘調査が継続されている。

## ② ブバスティオン

ウナス王の河岸神殿から北へ約500mの位置には南北100mの規模の巨大なワディがあり、入江状の地形が形成されている。テティ王のピラミッド葬祭殿東側からこのワディの北側にかけては、末期王朝時代以降にアヌビエイオンとブバスティオンという犬猫の聖獣の神殿が存在し、サッカラにおける一大宗教中心地となっていた。当時、このブバスティオンの北側の崖はバステト女神の聖獣である猫のミイラの墓所であったが、それは新王国時代の岩窟墓群を再利用したものであった。

ブバスティオンでは、フランス国立科学研究センターのアラン・ジビーが1980年代より調査を行っており、これまでにアメンヘテプ3世の宰相アペルエル（アペリア）、アメンヘテプ3世時代の絵師トトメス、トウトアंकアメン王の乳母マヤ、アクエンアテン王の治世のメンフィスのアテン神殿の書記ハティアイ、ラメセス2世時代の外交官ネムティメスらの岩窟墓が発見されている (cf. Zivie 2008)。なお、この地区にあるトトメス3世とハトシェプスト女王の共同統治時代のネヘシの墓は、これまで確認された中で最古のサッカラの新王国時代の岩窟墓である。

## ③ テティ王ピラミッド北墓地

テティ王のピラミッドの周辺には、前述の2箇所よりは比較的小規模ではあるが、新王国時代の墓が多数存在することが知られている (cf. Quibell and Hayter 1927; Hawass 2011)。テティ王のピラミッドの周辺からは、第18王朝後期から第19王朝に年代づけられる、同王を神格化し、崇拝する人物が描かれたステラや彫像が出土しており、この時代にテティ王が「プタハ神に愛されし者」という形容辞を与えられ、崇拝の対象になっていたことが知られている (Yoyotte 1958: 96, n.5; Malek 1992: 68f, 71)。おそらく、このテティ王信仰の隆盛から第18王朝にこの地域に新王国時代の墓地が形成されたとみられる。この地域の新王国時代の墓は、ウナス王の参道の南側の墓地と同じ「トゥーム・チャペル」の形態をしてい

るが、比較的規模が小さく、古王国時代のマスタバ墓の天井、あるいはマスタバとマスタバの間に人為的に粘土質の石灰岩、タフラと石灰岩チップを地業として詰めて硬化させ、その上に上部構造を造って、埋葬室に繋がるシャフトの上部のタフラ層の部分は石灰岩の切り石で壁を作り、さらに下の岩盤層を掘削している。この墓地から西に約 1km の場所には、アメンヘテプ 3 世の治世にプタハ神の聖獣アピス牛の墓地、セラペウムが造営され (Dodson 1990: 88)、ちょうどこのテティ王ピラミッド北墓地の中を参道が横切っていた。おそらく、テティ王ピラミッド北墓地は、テティ王の信仰だけでなく、アピス牛の葬送の参道に位置していたことも、その発展の一因として考えられよう。

以上の 3 箇所がこれまでサッカラで確認される中心的な新王国時代の墓地であるが、近年それ以外の新王国時代の墓が確認されている。例えば、現在のアブ・シール村に隣接する北サッカラの台地の東側の崖下にはラメセス 2 世時代の高官ナクトミンらの墓が確認されており (Yousef 2011; Daoud, Farag, Eyre 2016)、日本の調査隊が調査を行っているアブ・シール南丘陵遺跡頂部ではラメセス 2 世の王子カエムワセトの娘とみられるイシスネフェルトの墓が発見された (吉村他 2010a, 2010b; Kawai 2012)。

前述のように、サッカラの新王国時代の墓地については、欧米の博物館、美術館に収蔵されている膨大な記念物、副葬品などの遺物の本来の出土地が不明であることから未発見の場所が存在することが指摘されている。また、メンフィスのプタハ神の神官の墓地やサッカラに埋葬されたとされる王族の墓の所在も明らかではない。例えば、アメンヘテプ 3 世の長子でプタハ大司祭であったトトメス王子やラメセス 2 世の第 2 王妃でカエムワセト王子やメルエンプタハ王の母であるイシスネフェルト王妃の墓の所在も不明である。このように、サッカラには、依然として新王国時代の未発見の墓地が埋蔵されている。

以前、ファンダイクは、第 18 王朝のアメンヘテプ 3 世の治世におけるプタハ・ソカル・オシリス信仰の隆盛とウトアンクアメン王の治世における高官の墓地と王墓地との分離により、メンフィスのネクロポリスが彼らの墓地として選ばれたとし、それ以前の第 18 王朝の高官の墓が存在しないと示した (van Dijk 1988)。マーティンは、新王国時代にメンフィスが重要な行政の中心地であったにもかかわらず、その墓地であるサッカラでは新王国時代の墓があまり発見されていないと指摘し、北サッカラの台地の東側の崖に新王国時代の高官の岩窟墓群があると推測している。そして、そこに所在が不明な第 18 王朝前期から中期にかけての墓地が存在する可能性を指摘している (Martin 1991: 26-27)。また、ゲスラー・レールは、トトメス 3 世の治世にメンフィスが王都になったにもかかわらず、上記のテティ王のピラミッド北墓地やウナス王のピラミッドの参道の南側からアマルナ時代以前に年代づけられる墓が存在しないことに着目し、サッカラの他の地域に第 18 王朝のアマルナ時代以前の墓地が存在すると推定している (Gessler-Löhr 2007: 66)。

### 3 北サッカラの新王国時代の墓地の研究史

マーティンやゲスラー・レーンが指摘するように、未発見の新王国時代の墓地は、北サッカラ地域に存在する可能性が高いと考える。そこで、筆者らは、調査の対象地を、テティ王ピラミッドの北側の北サッカラの台地を調査の対象とした。以下、当該地域での過去の調査の概要について述べる。

北サッカラ地域における新王国時代の墓地としては、前述のように、これまでの発掘調査によって、ブバステオン (Zivie 2008)、テティ王のピラミッドの周辺 (Quibell and Hayter 1927)、北サッカラの台地の崖における岩窟墓の例などが知られていた。それ以外の場所については、エジプト学の草創期から遺跡地図の作成が試みられてきたが、包括的な遺跡地図は存在しておらず、全体の遺跡分布の様相は把握されていなかった。従来の遺跡地図としては、ドイツのレプシウスが残した地図 (図3) (Lepsius 1849-1859)、フランスのド・モルガンによるサッカラを含むアブ・シールからダハシュールまでの遺跡地図 (図4) (De Morgan 1897) などがあり、測量的には正確さに欠けるものの、墓の分布に関する貴重な情報を提供している。ド・モルガンの遺跡地図では、墓の位置が地図上に示されており、それぞれの墓を色で時代を分けて示している。墓の年代の根拠については全く説明が記されていないが、おそらく遺物の年代から推測したものと思われる。下記の踏査では、この遺跡地図に記された新王国時代の墓の分布を手掛かりに踏査を行い、精密さには欠けるものはかなり有益な情報であった。20世紀になると、北サッカラでは、英国隊がテティ王ピラミッド北墓地で発掘調査を実施したが (Quibell and Hayter 1927)、調査の対象は古王国時代あるいは中王国時代が中心であり、新王国時代の墓についての記述はあまり割かれていない。より正確な当該地区の地図は、1977年にフランスの Consortium SFS.IGN が作成した、エジプト住宅省の縮尺 1/5000 の地図のシート H23 と H22 であるが、遺跡地図を目的としたものではないので、遺跡の情報は含まれていない。

近年、イタリア隊による北サッカラ遺跡の保存管理を目的とした地図 (Lucidi et al. 2003) や、英国隊による物理探査の地図 (Mathieson and Ditter 2007) などが発表されているものの、実際の踏査による遺構や遺物の分布に基づいた遺跡地図は存在していない。本格的な調査に先立って、まずは北サッカラ地域全体の遺跡分布を踏査によって把握し、その中から新王国時代の墓地の所在を明らかにすることが課題と認識された。

#### 4 第1次調査 (2016年5月)

以上のような学史上の課題に鑑みて、2015年に予備調査を行い、2016年にエジプト考古省から正式な許可を得て調査を開始した。2016年はまず踏査を行い、遺物や遺構の分布に基づく遺跡地図の作成を目標とした。5月に実施した踏査では、東に北サッカラ地区のテティ王ピラミッド北墓地、西にセラペウム、そして北にアブ・シール湖の3地点を結ぶ約 0.87 km<sup>2</sup> の三角形のエリアで踏査を行なった (図5) (河合他 2017a)。Garmin の GPS 受信機を利用して、

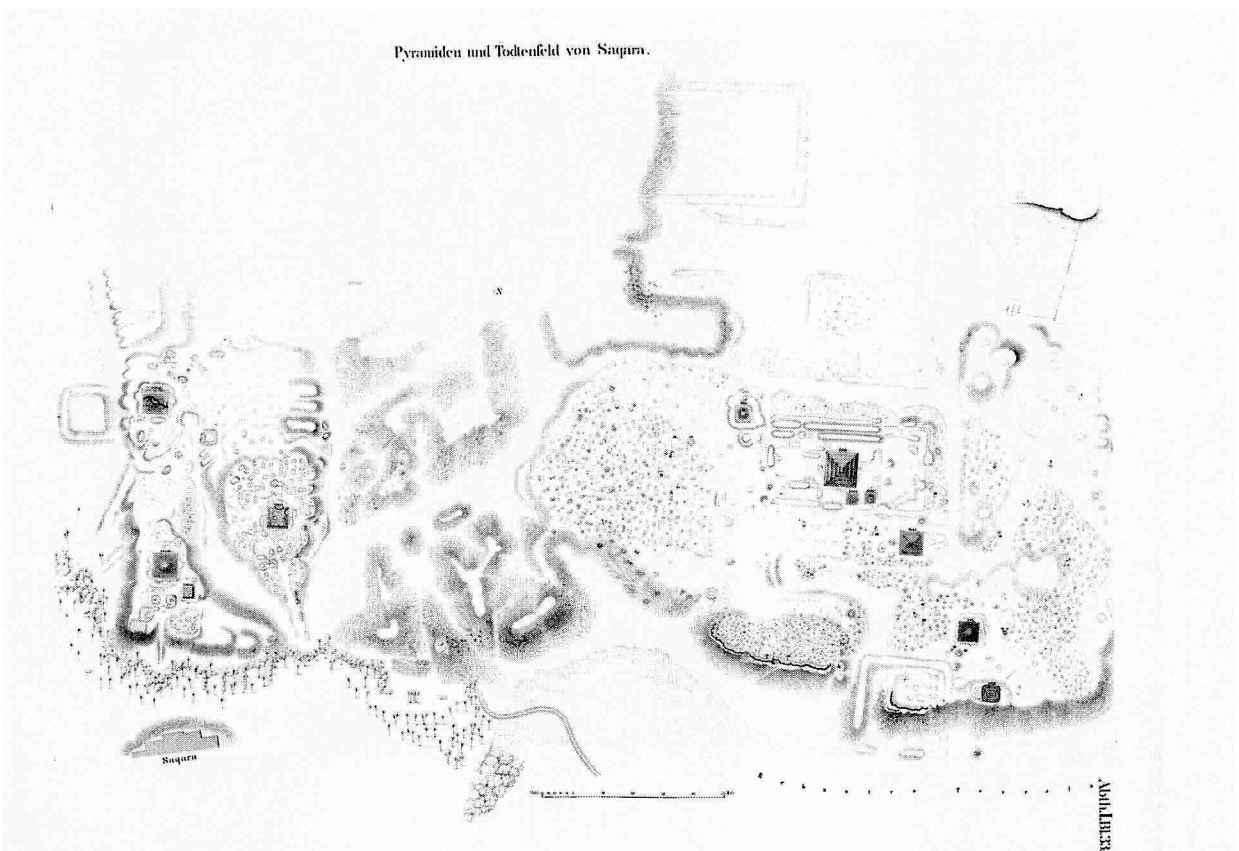


図3 レプシウスによるサッカラ遺跡地図 (Lepsius 1849-1859: Abth.I.BI.33)

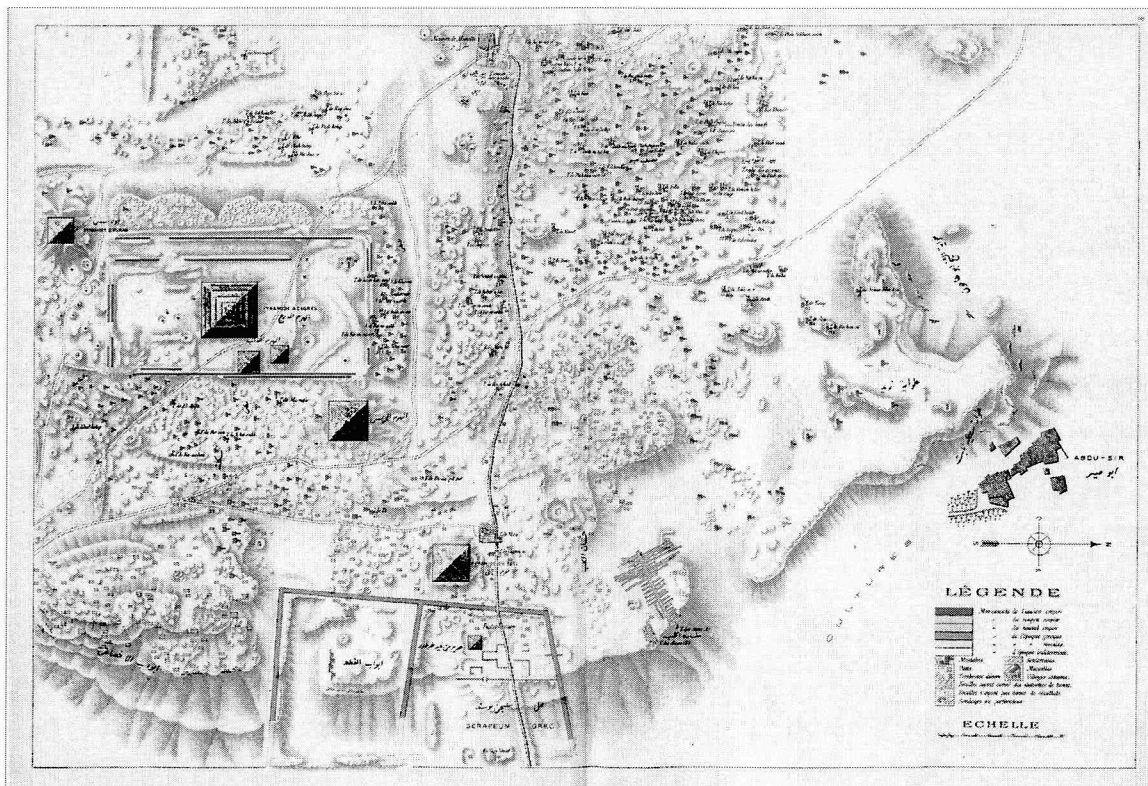


図4 ド・モルガンによるサッカラ遺跡地図 (De Morgan 1897: 10)

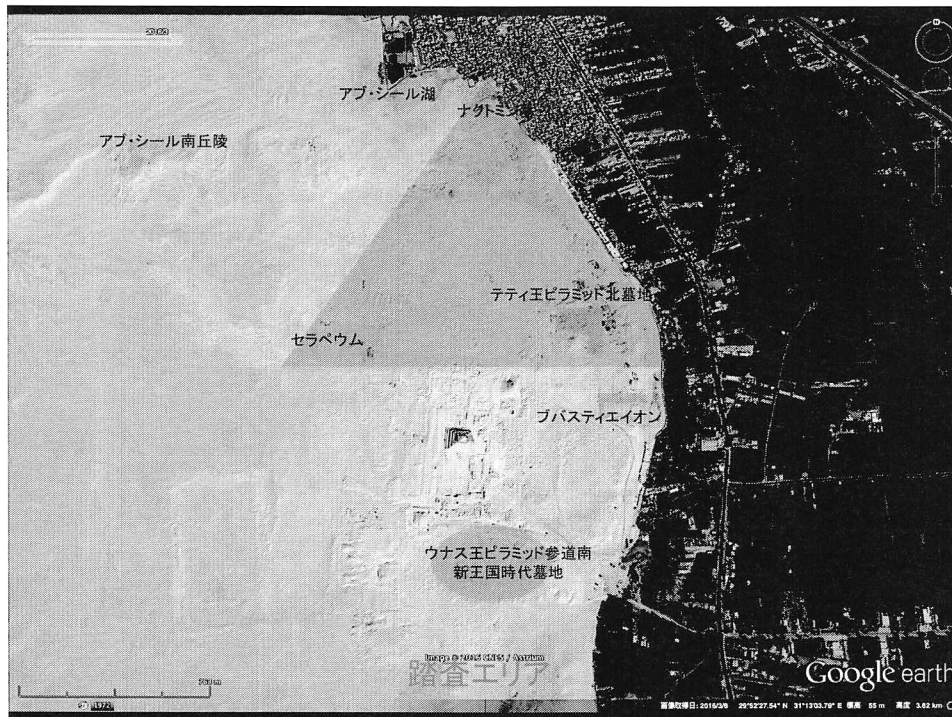


図5 北サッカラ踏査エリア

踏査によって認識される特徴的な遺構および遺物を記録しながら踏査を実施した。特に調査研究の目的とする新王国時代の遺物を注視した。

まず、踏査はセラペウム付近から開始し、アブ・シールのワディ沿いに北上する進路をとった。セラペウムは、特に末期王朝時代からプトレマイオス朝時代に活発な活動がみられ地表面に散布する土器片は末期王朝時代からプトレマイオス朝時代のものが大部を占めていた。アブ・シールのワディを北上し、古代アブ・シール湖の位置までの間を踏査した限りでは、新王国時代の土器はほとんど確認できなかったが、北サッカラの台地の突端部と現代の墓地の間の北側斜面からは人形木棺の手の部分の破片や新王国時代の土器片が確認された。さらに、そこから北サッカラ台地の東側の崖際を南下して、第19王朝ラメセス2世時代の高官ナクトミンの墓の周辺を踏査したが、風性砂層の堆積が厚く、同時代の遺物は確認できなかった。

北サッカラ台地の東側の崖では、岩盤が露頭している数箇所が既に主要な新王国時代の墓地として知られるプバステイオンに立地が類似しており、風性砂層の堆積の下に岩窟墓が存在する可能性があるが、新王国時代の土器片はほとんど表採できなかった。崖下の低位砂漠では、新王国時代の土器が散布している場所も看取され、特に現地住民の聖所とされている「ユーセフの牢獄」と呼ばれている場所には、新王国時代のものと思われるシャフト墓の存在が確認された。

台地の上部では、まず、すでに新王国時代の墓の存在が知られているテティ王のピラミッド北墓地の西からセラペウムにかけて東西方向に踏査を行った。このエリアは西に向かうにしたがい次第に末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の土器の密度が濃くなる傾向があった。お



そらく、セラペウム周辺の末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の遺構が多いことを示すものと考えられる。その後、テティ王のピラミッドの北側から東西方向に踏査を行った。このエリアは、ド・モルガンの地図で新王国時代の墓の存在が記録されているが、遺構や遺物についての具体的な情報についてはほとんど知られておらず、これまで発掘調査も実施されていなかった。そして踏査の結果、このエリアではテティ王のピラミッドの北西に舌状に広がる台地を中心に約 10 万km<sup>2</sup>の範囲に新王国時代の土器片やその他の遺物が多数表採された（図 6、図 7）。これは、ド・モルガンの地図の新王国時代の墓の分布をほぼ裏付けるかのような分布を



図 6 北サッカラの新王国時代の遺物と遺構の分布

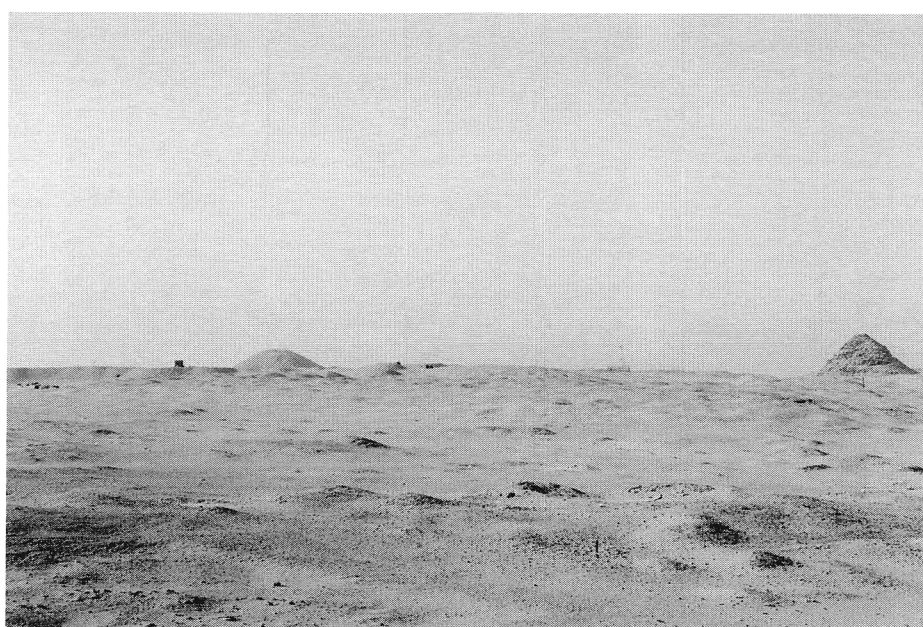


図 7 新王国時代の墓地が確認された舌状の台地

示した。特徴的な土器片は、青色彩文土器などの彩文土器、アンフォラ、「ビール壺」、植木鉢、頸部に沈線が施された長頸壺、貯蔵用壺などである（図8）。その他に、ディスク形ファイア  
ンス製ビーズ、ステラの破片、木棺片、陶棺片などが新王国時代の年代を示した（図9）。また、  
背面にトトメス3世のカルトウーシュが刻されたガチョウの形態をした完形のスカラボイド  
が表採された（図10）。新王国時代の土器は第18王朝初期から中期の土器が当該地区の東側  
に集中し、後期からラメセス朝の土器が西側に集中する傾向がみられた。新王国時代の遺物以  
外には、古王国時代第4王朝の土器が当該地区全体で検出された。おそらく、このエリアでは

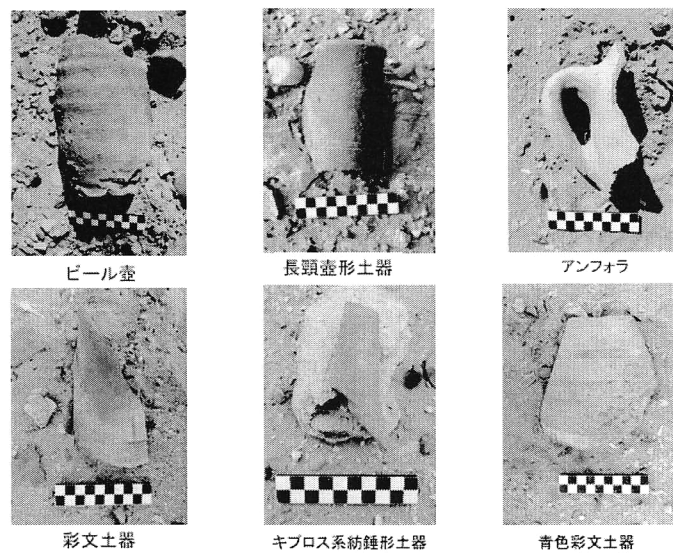


図8 新王国時代の墓地が確認されたエリアの主な表採土器片

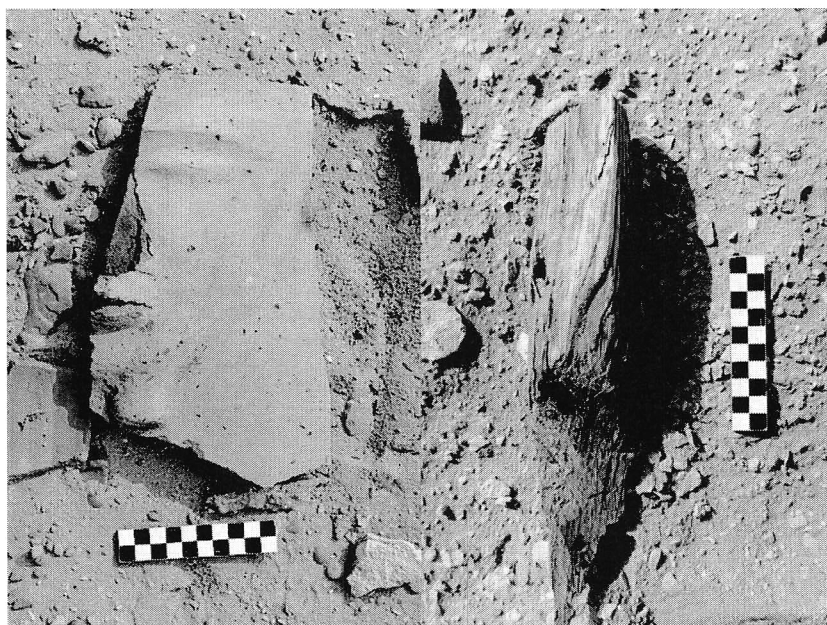


図9 陶棺片と木棺片

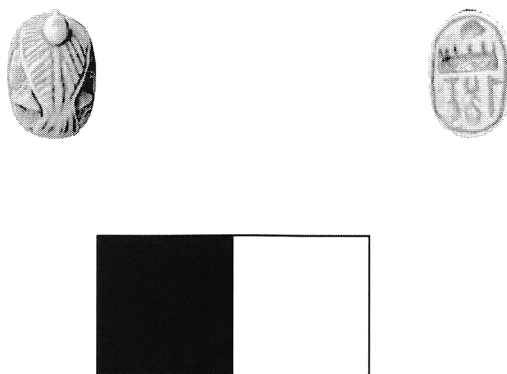


図 10 トトメス3世の即位名が記されたスカラポイド

古王国時代に墓地が形成され、その上に東側から第18王朝の初期から徐々に新王国時代の墓が造営されたと推定された。このエリアで確認された落ち込みの数は500を超え、古王国時代および新王国時代の墓のシャフトや構造物の存在を示唆している。

## 5 第2次調査（2016年8月）

2016年8月に実施した調査では、5月の踏査で新たに新王国時代の墓地の存在が確認されたテティ王ピラミッド北墓地の北西部の墓地とサッカラ台地の東側崖部に位置するナクトミンの墓の南西の台地上部（A地区）にて補足踏査、3次元地形測量、部分的な物理探査（EM探査）を行なった（図11）（河合他2017b）。なお、3次元地形測量および物理探査は（有）三井考測によって実施された。また、当該地区の人工衛星画像解析を行った東海大学情報技術センターの恵多谷雅弘氏と共にグランド・トゥルースを実施し、北サッカラ台地の遺構分布の特徴を把握することができた。テティ王のピラミッド北西部の墓地の西端に位置する古王国時代のカエムネスウトのマスタバ墓の周辺は、近年エジプト考古省によって盗掘被害のために緊急発掘が行われ、は新王国時代のシャフト墓の位置が確認できる。この場所の状況を観察する限りでは、古王国時代のマスタバ墓の上部構造にシャフトを穿つか、マスタバの中込であったタフラで地業をして床面を作り出し、そこにシャフトを掘る様相が確認された。このような古王国時代の墓地を新王国時代に再利用する方法は、テティ王ピラミッド北墓地でも確認できる。テティ王ピラミッド北墓地では、日乾レンガで上部構造を構築し、小型のトゥーム・チャペルとなっている。おそらく、テティ王ピラミッド北西部の墓地は、このような構造を持つ新王国時代の墓が密集していたものと推測される。

一方、北サッカラの台地の東側崖部では、ナクトミンの墓とその周辺の墓のような岩窟墓の存在が想定される。EM探査では、砂と岩盤の境目や日乾レンガの存在が明らかになったが、砂層の堆積が厚いために具体的な遺構の存在を確認するに至っていない。

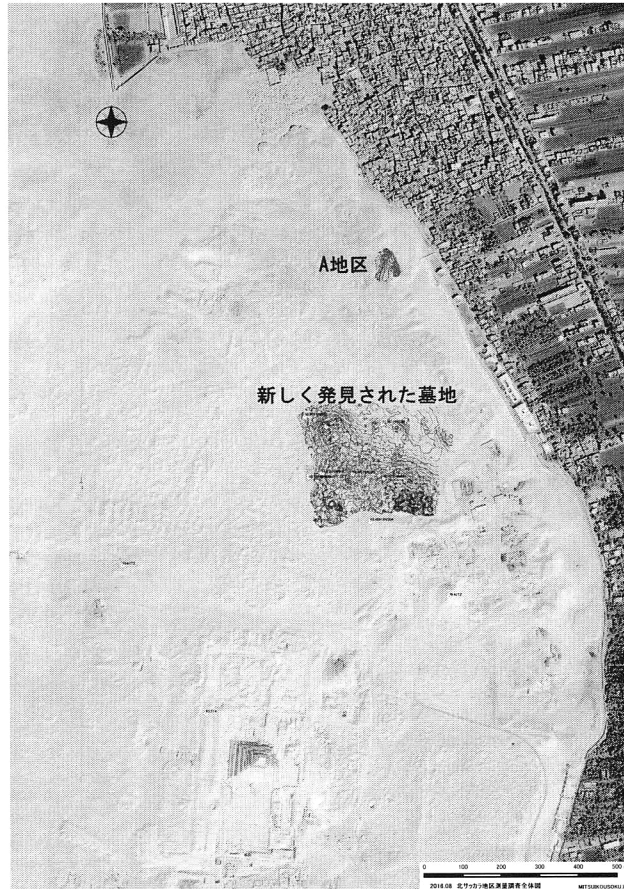


図 11 北サッカラ第2次調査地区の衛星画像（三井考測作成）

## 6 まとめと今後の展望

これまでサッカラ遺跡の新王国時代の墓地は、①ウナス王ピラミッドの参道の南の墓地、②ブバステイオンの墓地、そして、③テティ王ピラミッド北墓地の主に3カ所が知られていたが、我々の北サッカラ台地における踏査によりテティ王のピラミッドの北西部の約10万㎡の範囲に新たに新王国時代の墓地を確認することができた。この新王国時代の墓地は古王国時代の墓地の上に形成されたとみられる。そして、遺物分布の傾向からこのエリアの新王国時代の墓地は、おそらく東から西に向かって形成された可能性が指摘された。台地上の新王国時代の墓は、上部構造があまり残存していないので、日乾レンガ製のトゥーム・チャペルを中心としたシャフト墓だったと推測される。テティ王ピラミッド北墓地と同様に古王国時代の遺構を再利用して形成されたのであろう。北サッカラ台地の東側には第19王朝のラメセス2世治世下の岩窟墓が存在しており、おそらく周囲にも同様な岩窟墓の存在が想定されるが、考古学的踏査あるいは物理探査による確認には至らなかった。次期調査でも踏査を継続し、成果を詳細に検討した上で試掘を行い、北サッカラにおける新王国時代の墓地の本格的な発掘調査を開始したいと考えている。

## 謝辞

本研究は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）（海外学術調査）「エジプト、サッカラ遺跡における新王国時代の墓の調査研究」（課題番号：15H05163、研究代表者：金沢大学河合望）の助成を受けて実施された。ここに記して感謝したい。調査の実施に際し、ご協力およびご指導くださった早稲田大学名誉教授・東日本国際大学学長の吉村作治先生、早稲田大学教授の近藤二郎先生、調査メンバーの高橋寿光氏（東日本国際大学）、米山由夏氏（鶴見大学大学院）、石崎野々花氏（早稲田大学大学院）、衛星画像の解析を担当してくださった東海大学情報技術センターの恵多谷雅弘氏、地形測量と物理探査を実施していただいた（有）三井考測の三井猛氏、梅田由子氏に感謝申し上げる。

また、エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古大臣カーレッド・アル＝アナニー閣下（博士）、外国調査隊管轄事務局長ハニー・アブー・アル＝アズーム氏、サッカラ査察局長アラ・アル＝シャハータ氏、同副局長サブリ・ファラグ氏、チーフインスペクターのムハンマド・ユーセフ氏およびハムディ・アミン氏、我々の調査の査察官ターメル・ラガブ・アブダッラー氏、アハメド・ムハンマド・アフィフィ氏を始めとする方々（肩書きは当時のもの）に多大なご協力を頂いた。ここに感謝の意を表したい。

なお、本稿は2017年7月30日に関西大学梅田キャンパスで開催された「エジプト学セミナー2017」で発表した内容に加筆修正したものであり、それ以降に実施した調査の成果は含まれていない。最後に「エジプト学セミナー2017」に招聘してくださった関西大学国際文化財・文化研究センターの吹田浩先生とスタッフの皆様に感謝申し上げたい。

## 【参考文献】

- Bryan, B. M. 2005 "The Administration in the Reign of Thutmose III," in Cline, E. and O'Connor, D. (ed.), *Thutmose III: A New Biography*, Ann Arbor: University of Michigan Press, pp. 69-122.
- Daoud, K. Farag, S. Eyre, C. 2016 "Nakht-Min: Ramesses II's charioteer and envoy", *Egyptian Archaeology* 48, pp. 9-13.
- van Dijk, J. 1988 "The Development of the Memphite Necropolis," in Zivie, A. P. (ed.), *Memphis et ses Nécropoles au Nouvel Empire*, Paris.
- Dodson, A. 1990 "Crown Prince Djhutmose and the Royal Sons of the Eighteenth Dynasty," *Journal of Egyptian Archaeology* 76, pp. 87-96.
- De Morgan, J. 1897 *Carte de la Nécropole Mempite: Dahchour, Sakkarah, Abou-Sir, Le Caire*.
- Gessler-Löhr, B. 2007 "Pre-Amarna Tomb Chapels in the Teti Cemetery North at Saqqara," *Bulletin of the Australian Centre for Egyptology* 18, pp. 65-108.
- Hawass, Z. 2011 *The Secrets from the Sand: My search search for Egypt's past*, Cairo: The American University in Cairo Press.
- Hayes, W. C. 1938 "A Writing-palette of the Chief Steward Amenhotpe and Some Notes on its

- Owner," *Journal of Egyptian Archaeology* 24, pp. 9-24.
- Kawai, N. 2012 "The tomb of Isisnofret at Northwest Saqqara," *Abusir and Saqqara in the Year 2010*, Prague: Czech Institute of Egyptology, Charles University, pp. 497-510.
- Lepsius, K. R. 1849-1859 *Denkmaeler aus Aegypten und Aethiopien: nach den Zeichnungen der von seiner Majestät dem Koenige von Preussen Friedrich Wilhelm IV nach diesen Ländern gesendeten und in den Jahren 1842-1845 ausgeführten wissenschaftlichen Expedition*, Abth. 1-6 in 12 Bd. Nicolaische Buchhandlung, Berlin.
- Lucidi, T et al. 2003 *The North Saqqara Archaeological Site: Handbook for the Environmental Risk Analysis*, Pisa : PLUS-Pisa University Press.
- Malek, J. 1992 "A Meeting of the Old and New: Saqqara during the New Kingdom," in Lloyd, A. B. (ed.), *Studies in Pharaonic Religion and Society in Honour of J. Gwyn Griffiths*. London.
- Martin, G. T. 1991 *The Hidden Tombs of Memphis: New Discoveries from the Time of Tutankhamun and Ramesses the Great*. London: Thames & Hudson.
- Mathieson, I and Ditter, T 2007 "The Geophysical Survey of North Saqqara, 2001-7," *Journal of Egyptian Archaeology*, Vol. 93: 79-93.
- Quibell, J. and Hayter, A.G.K. 1927 *Excavations at Saqqara: Teti Pyramid, North Side*, Le Caire: Institut Français d'Archéologie Orientale.
- Raven, M. 2005 *The Tomb of Pay and Raia*, Leiden: Egypt Exploration Society.
- Raven, M. and van Walsem, R. 2014 *The Tomb of Meryneith at Saqqara*. PALMA 10.Turnhout.
- Tawfik, S. 1990 "Recently Excavated Ramesside Tombs at Saqqara. 1. Architecture", *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts abteilung Kairo* 47: 403-409.
- Youssef, M. 2011 "Die Ausgrabungen südlich des Grabes des Nachtmin in Sakkara-Nord", *Sokar* 23, pp. 84-89.
- Yoyotte, J. 1958 "À propos de la parenté féminine du roi Téli (VIe dynastie)," *Bulletin de l'Institut Français d'Archéologie Orientale* 57, pp. 91-98.
- Zivie, A. 2008 *The Lost Tombs of Saqqara*, Cairo: The American University in Cairo Press.
- 河合望 2017 「メンフィス・ネクロポリスの調査と研究」 常木晃・西秋良宏・山内和也（編）『季刊考古学第 141 号・特集 西アジア考古学・最新研究の動向』、雄山閣、pp. 83-86.
- 河合望、吉村作治、近藤二郎、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花 2017a 「第 1 次北サッカラ遺跡踏査概報」『エジプト学研究』第 23 号、pp. 127-144.
- 河合望、吉村作治、近藤二郎、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花 2017b 「第 2 次北サッカラ遺跡踏査概報」『エジプト学研究』第 23 号、pp. 145-181.
- 吉村作治、河合 望、柏木裕之、西坂朗子、高橋寿光 2010a 「第 18 次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第 14 号、早稲田大学エジプト学会、pp. 14-48.
- 吉村作治、近藤二郎、河合 望、柏木裕之、西坂朗子、高橋寿光 2010b 「第 19 次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第 14 号、早稲田大学エジプト学会、pp. 49-59.